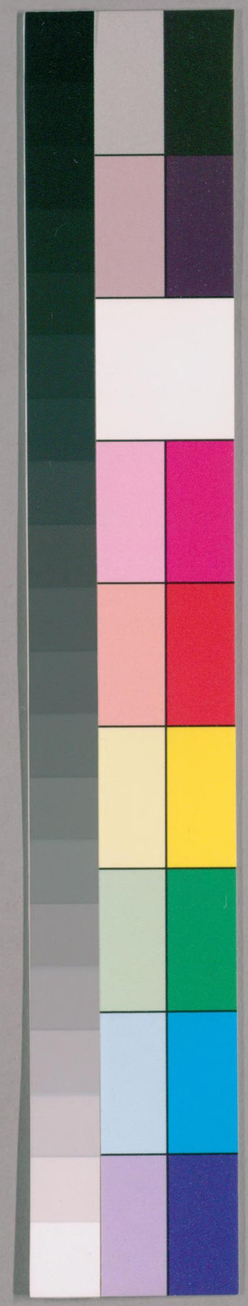
丹鶴叢書

草根集 九

117
105
2

東京圖書館
和書門
叢書類
別 函
二 架
二 號
一〇五 冊



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

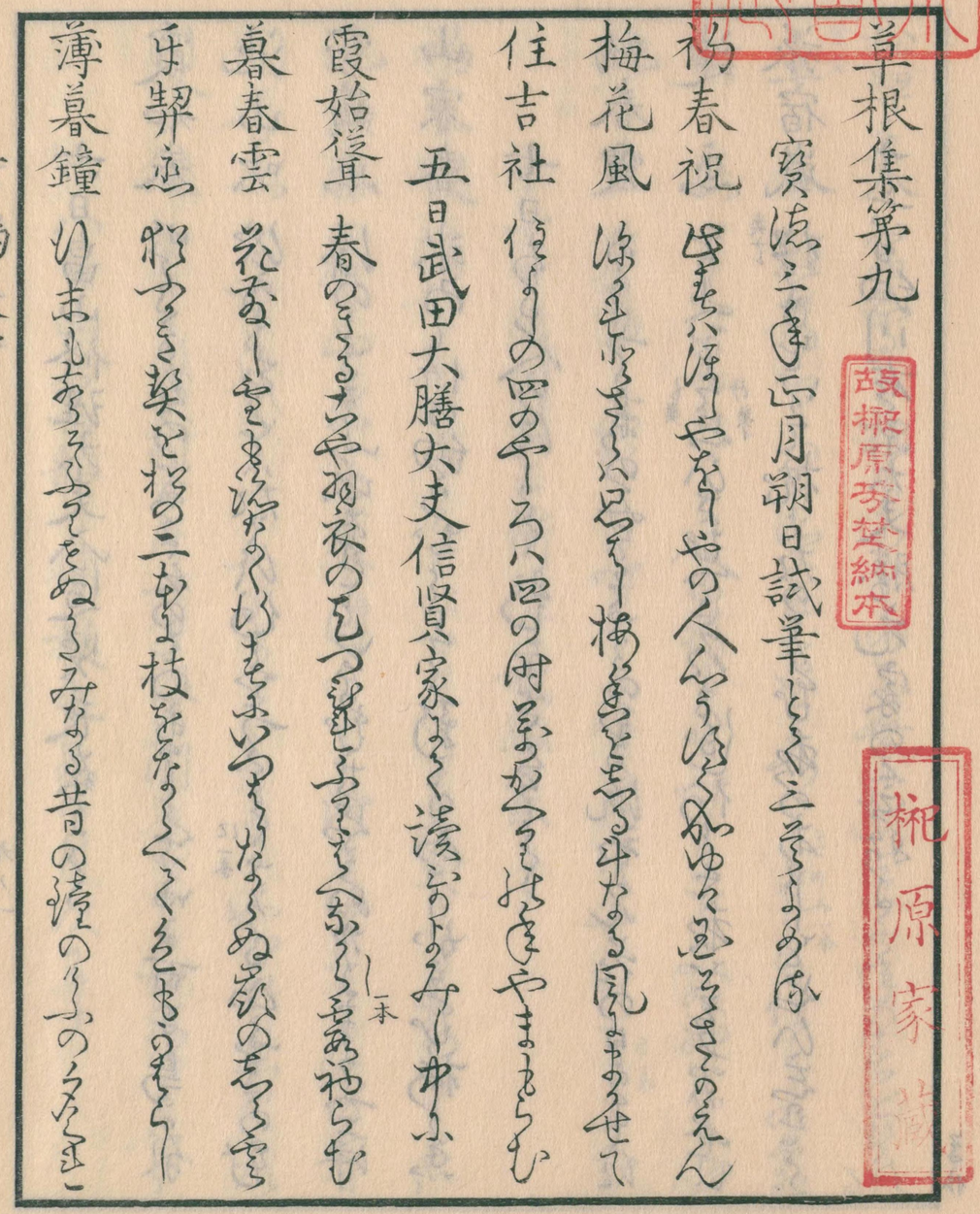
ガラス使用

東京圖書館藏

故椒原芳埜納本

椒原家藏

草根集第九



寶徳三年正月朔日試筆とて三そくよめ侍

初春祝　ほまれ深しやをしやの人んうほくかゆて玉そさのえん

梅花風　深しきにさしハ思ひし梅花をしる斗なる風よりせて

住吉社　住よしの四のやしろハ四の時おかへ其時やまもらむ

五日武田大膳大夫信賢家にて讀ぶりよみし中に

霞始聳　春のきるたゝや羽衣の乙つ雲にふまさへなくらし一本あれらむ

暮春雲　花なし雲も浦なくけまにいつまりなるぬ嶽の志ろ雲

手契恋　ねふさき契をねの二本に枝をなくへてくものまらし

薄暮鐘　いまもなくてふまをぬるみなる昔の鐘のうふのうちまに

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

六日畠山修理大夫入道賢良家にて

霞知春　明ぬるまの霧にこのもの[illegible]百千鳥の[illegible]

池山吹　[illegible]

寄蘋恋　[illegible]

山家春　氷ゐし行の細[illegible]

七日ある人の[illegible]

初春霞　[illegible]

逢恋　[illegible]

旅宿嵐　[illegible]

十一日細川右京大夫勝元家のくしゝ始る

松挈多春　[illegible]

立春　[illegible]

祈恋　[illegible]

眺望　[illegible]

十七日渋川右兵衛佐義鑑家にて

初春霞　[illegible]

池岸藤　[illegible]

聞音恋　[illegible]

関路夕鐘　[illegible]

十八日山名兵部少輔教之家の月次にて

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

庭梅久薫　ふきかよふ梅の匂ひをとめくの言葉にこもる庭のおもかげ

當坐
鶯出谷　かへりこぬ鶯さそふ埋木の雪のむすぶつ谷川のおと（の川おとゝ一本）

寄旅恋　古郷の人はいかにしのぶらんよりはかなき旅の夢ならで

曙峯雲　かすみたつ今やとみやまの峯のあらしも横雲の影

廿一日冷泉宰相持為の家にまかりてたまし次よみ
ぶあまりし

當坐巻頭
霞　山姫のかすみの衣のけさは春や日影にかすむさくらの川岸

鹿　あきはきつまなき鹿の声の細きにうらみ（の一本）（うらみ一本）

千鳥　なにはの浦のまさごの数よりも三代の跡をふみまよふらん

為邦卿　為守卿　持為卿　三代なるなり

手拡

旅恋　草枕かりねの夢にたちかへりふるさと人をやとふらん

山　高ねのゆきをふみわけて花のさくらの山の端の水

廿二日一色左京大夫教親の家の月次に

松翠万春　いまもまつる千代のはじめの十返りかゝる松のみどりに

當坐
霞　はるの霞のうちにはふかくかすみの山のはてにぞ

忍恋　思ひあまりしのぶにたへぬ心やはうちいでんとやなきてさへしらん

待恋　いかにせんたのめし日をまつほどのくるしきの夕暮（うき一本）

鷺　いにしへの池のかゞみの松がえにすむ白鷺のこゝろを語るなり

廿四日大光明寺にて右衛門佐石橋たまへ佐
祐義なく月次始まりけるに（の一本）

初春見鶴　世ハまちと霧もたゝまたつ鶴の羽風も深ハ浪る日の新

餘（當坐）寒　風さゆるまちの霧のむら消に又りえ出る明ちへの若草

厭　恋　いとゝ寒て我住さとを恋る程うき世思ハ君やあらん

田家　もる人のすゝの山田や廣くこむ嶽の廣里の窓せまくも

神祇　三のまのかくを社とまつしめて清くりみかゝぬ玉清高ゆる

二月四日右京大夫の家のくろうし

山霞　緑手縄引けるや霧まやりの桂原の山のまちの松人

家々恋　たとしまやたゝそ時も誰なるぬ伊れりれさやさ

水郷　花鳥のあまり川かせ里をまとくかゝる洞庭を枕にそく

十日三井ゆ佛地院僧都ゆ弄坊の月次に

子祐

山家柳　山陰のおとろのうみにまし事もまゝふ嶽を柳の原

夕待花　やま稼たのめてかゝる白雲もまゝ偽のまゝぬ夕くれ

惜名恋　ゐぬとも延せのまなれハ宿もとて夜陰なんなのりそ浦し

河（當坐）春月　同じや川原のうくやとるしうさき霧の衣手乃月

見恋　ほのゝゆる霧の内の旬ひゆる花を思ひのこそ持ひり

寺　炊のかくもうかひて鉢きまれ法の山ゆ雨の水そふ事

十七日細川上総介氏久月次せられしに

庭松春久　手向草松もむ供ふら濱（あゝ楽）の庭のまさこやまゝ代乃ちる（数一本）

朝（當坐）春草　まとをきかゝへの草葉の新草にやとり物ゆるまちの新草

早秋露　我社のふるき霧のミ消やらて又結ひくる秋にあふなな

恨　忘　此世にて恨も恨とおもはゞ人ようきあと又やまれむ

古寺嵐　なにはたゞ浦の漢詩にまゝ消ぬいまゝ嵐や清さそふん

十八日　出立京師ゟ入道浄元の家の月次に

霞添春色　おすとみ浦ハ霧にまゝ春のそこき末の松ゟ

當坐　早春霞　まちやきる織女もたゞし新所の薄き霧の玉の羽衣

寄春木恋　身にそしむそこも白ひも粧ましふ（よ奕）むのかま孫の所し葬ハ

春古寺鐘　小袖衛や川せにゝ孫の灯も落ける鐘と霧あらそふ（そ一本）

春旅泊舟　いゝ孫ゝまちのゝ孔のゝ櫻うゝ風白ふかちのまくゝ小（八奕）

十九日　修理大夫家の内ゝの月次に

梅冠露暖　梅のむ園をくしく埋夫のもとつえとくる露乃小むも

當坐　埽　鳥　たゝえこゝ行嶽のまゝ葛の葉葉さへ人の羽風にてかへる也

顕　恋　思のまゝさこを深ふ志きまて思ひ出なしぬよをしらう（ら一本）浦

廿日　赤松刑部大輔教貞家の各月会に

花契千年　咲白へなくゝる庭の松ゝえに子世の遠かる花の灯をさ

當坐　霞遠聳　くゝ新ゝれハたゝ川消ぬよの行ハ霧の家れる沖つまゝ

依涙顕恋　あやしめさ文に板（戸本）まもとり濡ぬ園の莚と雨に来せた

山館煙細　住人もあるなきゝの谷隠里のゝる調やまちのいとゆふ

廿一日　細川右馬頭入道兼賢家の会始に

風静花盛　花の枝も風さへゆらくむれの麓にのゝる庭の白雲

當坐　簷　梅　もえ出る新の志ふをかくゝや神にこそ仕く白ふうめつ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

古郷荻　宿ゝ迄ハ昔和毎に称し床ハ荻のまゝ床く杖かせ候

時雨過　雲ゝ迄ぬまゝ山深く霧こめて時雨ハ座にたれの事なり

廿二日清水寺辺十住心院の心恵法師弟子心（律一本）

孝とゝ申し身まかりし（仁一本）一周忌の仏事の次五十

首の讀ゝ弔ひにまゝみし事に

山早春　うしとみしまちもめ口るる辺山もそ烟や雲あきぬん

落花多　さきてぬく日も命の内にしてあはしものにきて数そふ

松藤　此度もかゝしとくこそなひきゆめ志つえ枯ぬる嶺（きし一本）の松ゝ

夕雨　神ぬらしなきのたゝにさゝ（へ一本）にまゝきさゝ江の夕雲の雨

旅泊　人の世ハ新ようまれ多くしに命かゝるもし明の漱戸

廿三日。草（招月一本）尾にて一讀（人ゝ来りて同上）みしに

朝山霞　淺ゝ為そ雲の内に出る日の名深るまちのさちつも

海邊月　さゝのけく果なき海もり月の光まつりる浦のくれ

閑時雨　くれ迄ふる心人にならのまの落ちり閑に時雨とそ

待空恋　あゝ波にたのめ（つ一本类）ゝ岩木山城くこぬこの演風もうし

遠村煙　おろまゝん嶺の嵐の山里によこそまゝて烟ともなし

廿ある我人に誘ひ出て東山の花ゝんにまゝかまゝ

ましに感ぶしるる程に如ましし若王寺より清

水寺ゑまゝての花静にくるまゝてみしに雙林も

のよに思月とうや昔康頼入道のまゝ高よりのつも

住る尾宝のうちもなくなりてる事を垣ひとつ（八一本）
へてきる尾に立入て日をくらし侍りし程に
廿三の前人とよみし中に

初花　みきしらぬ及ぬ里に一枝もあまりて白へ袖横に

夕花　山梅をはよりる夕嵐あれの名ばやれのこれらむ

暁花　変るる比しもむにはる月いとつ里なき名所の也

惜花　むみよとならふ事は思月の早きるも事あむきの山ゆせ

廿六日三井が浦の家にて読ぶあつらしに

春月　まちのよを早きるとみつまに読めハ夢語事あめる在所の月

交花　ちらはしきを歳むとあつめてか花の市なれきの山ふと

待恋　たのむよの志るし汁は桃の声をほとめて月にんこえつる（ぬ英）

寄苔恋（苔一本）　志しる身をうつまは苔の下こそ思ふさへ見ん所へ問とも

古寺　人とこれ法ぞ知るも梅が橋なるのましは絶えも

廿七日三井るまきのつとうるに小の別にのむの下にて

人と別をさくるとく

尋花　ゆふくむにあつすはうつらしと我を入ましきろうよひち（八一本类）

関花　あふ坂や浦も安むのけまさそふ関の走井

花莚　苔莚ふねつくきみをく梅ふむのちりつりるらん

廿八日人とともなひて石山のむ見よとくいてしに

船の中にて別をさくるとく

孤島霞　[illegible]

夜思花　花もさそ[illegible]

寄櫛恋　[illegible]

寄筆恋　[illegible]

水郷鳥　[illegible]

廿九日同寺南別所のむをみて影を拾て呉濟

寺[illegible]

嶺上花　花とそへむをおしてけりつる嵐の[illegible]

磯邊花　[illegible]

寄花懐（述一本）　[illegible]

[illegible]

三月二日佛地院信都長算坊月次ゝ

春雲　世はまの[illegible]

春鳥　[illegible]

春鐘　[illegible]

曉（當座）鶯　[illegible]

隔恋　[illegible]

浦鶴　[illegible]

四日右京大夫の家の月次ゝ

鶯　[illegible]

待空恋　[illegible]

門　杉　杉の戸のさし入に立る杉むらに山風深き栖をそしる
八日思徳院の井日に立る萬尾にて五へしとむとく
中さるにいなひのくてく沙汰し侍る
藤為松花　夏ほのむそ千ゝ里杉のもと及まぬる無のそやまくらん
山（當坐）霞　遠くの雲の光影にて雨にかくまぬ山の色のな
夜　鹿　秋のよのんなさのつらさとしなく嶽に鳴る横雲
宮露恋　消くらに深くも（と一本类）鳴まこみのあさまの明らの後の夕雲
懐　旧　何ゆゑもあ星一昔のそのをりは思ふへしともやはしし
ナムつるせ合るに無窮のんさしみてく南部に下向
せしを十ちるよりも雨ふりもしくて舞る国になりて法に

子拍

逗（なぶらに一本）留をしに井三日を大ちるの夏の小尾にて人々
一讀きらめ侍りしに
霞障山　朝日さしに天の岩戸の罪よりも山ハ雲を出ぬまちな
宮草恋　まちに兵結ふ契の如しよりうきを学のつま所のむ
旅泊船　湊風あらしいかるやのつらん枕の波に舟そこ西ふ
同日夕成就院法橋清賢昔よりもやとりに定かる（侍一本）
あるにて井その影をさくらさく
翫　花　夏ちらしつくるまゝ袖に白ふさらぬかさしのむのふ（さ一本类）
苗　代　むなまにや苗代小田にしめナつそうみぬさ手向るものふを
古　寺　出てこそ寺のふなるかきらぬ火も法の光なるにや（ふ一本类）

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

廿四日南都仏地院とて取まくある人もとめし
よみおの中に
初春氷　瀧河の水のんもいそてかり氷るいのちのしのたてむも
無名立恋　たのしきぬ浮たる雲のなき名とやたつの市路と思ひ月新
庭上古松　浪ふき（る一本类）二代の庭の松我立よるをみるやつまなき
廿七日泊瀬に集花為法樂五十首詠之在別紙
四月五日下向又東大寺の小庵にまく讀ぶのよみ
しゆけり
首夏風　夏にまゝあふきの風をいそるも明ともあし山月の宮
空帰恋　消禅寂衣をなほし昔にふきたる芝の在明のかけ

田家　小山田や秋のいなもの侍をかまるのやそそ夕日色ほく
十二日東大寺正法院とて坊にまく讀ぶのよみし中
けり
首夏卯花　夏きてハ袖を重ねて落ぐ卯ぬむしのきのさ衣
寄木別恋　頼めとやたのめおくる松風に夕きてむる袖の別路
残月越関（楽十シ）　流れてたゆきハつる関の戸にあの月の末の川くち
十四日或小庵にまく泊瀬法樂とて人のすゝめしに
初春霞　初春山霞をたのきくるまでも山ゆかの雲に語やつくん
深山月　たゞ山路やまるとこれハつる之月やこのもる大海の波
尋縁恋　あとてよいさたゞ（ふ一本类）流をよるへとてつゝへとふ流をくハ

鐘聲出　まさきの葉ハ千鐘ハきてとも十四日ハ江やんにまぎれて花をとる

十七日奥福寺別院菩提院内傳經院と云坊

にて鄙をさくるもとく

林早夏　若葉にて嶽の林の蔭やきも秋のこかる夜にきにかる

夜水鷄　おやすきて水解まし山川に又宮ゝてく水のにてる

寄烟恋　立のかる下の烟をけちやらて夜のむ林にふる源のなし

十九日成就院法橋清賢の息栄如意丸のつかひ

にて一座あるしに

郭公　時鳥こゑもく宵の郭なるに寄りる竹のふまもれ月

遣水　（类十三）くりはみる見るくの泉より出て絵をぬ座の中をかく

せる事とて春日社に来籠中侍りし百ゝ獨吟

法樂在別帋廿二日同宮（芝一本）来籠成就院法橋清

賢法樂三首懐帋に

雲間郭公　夜ゝも雲のもとてのぬきを隠ゝあらもなきぬ郭公

夏夜易明　山のもに出るをこんと桂の月を明出ハあくる夜のよの月

社頭松風　姉くと神のこゑの松風を七事の苔の袖にきて一家

夏（當坐）　夕　学蔵の明るの鏡の浮かぶに半みのける夕月の新

夏　湊　うらをて蔵あふ水のこゑとのにてるや延喜の田子とるらん

夏　蛙（蝉一本）　係なる夜のあま風是りとて梢の蛙（セミの一本）あり志さるし

五月朔日成就院にて讀歌あるしに

早　苗　立民も山岡のくぼの社とやこほしま苗をまゐてハり
待空恋　月まちて侍者と人にこせもを守ぬ是せつき鳥のあゝ
蕭寺松　嵐ハ夕の霧もおきあつぬ松（寸楽一本）にしるかほのかゝるかな
二日三日ハ上洛せつき銭別とく讀ぶあるしに
山朝霞　霧立たのせ山いつこ河毎のまゝ宝しまちの和あけ
逢夢恋　松をまぬ枕にはしし彼なまやあひそめ川の夢の後ハ
三日帰洛。右（七日一本）芳蘭佐の家にて讀ぶあるしに
更　衣　柳とるたゝ神山に入る人やいりひの為に衣のふゝ世
江　蛍　友ゑの昔のよるの思ひとやこしまれ口に蛍もゆゝ蘇
河邊鳥　鳥なるの水に新こぬ夕霧にゐらひをさしてさはて落くる

子拾

十五日修理大夫ゑにて聖廟法乗百首の中に
立　春　つゝなきる山の霧やくるほに松（寸楽一本）立ならぬさ衣の袖
池　藤　風ハ池に新をぬをしの毛もむもに松に（寸楽一本）むの夜波
蛍　火　ほに出る夜明を座こゝ礼堂のむをぬくつゝなる
秋時雨　草も木もほさし枕に附ゐきて志しのうゝもなる月の末
水　鳥　人をまぬ明浮の水に傾きてあるゝ篠やのまゝかものあ
見　恋　きり松にみるめハ何のとしあらん人にんをつくるきつ（寸楽）を
暁　雲　志しまゝに月なかしそしのつゝかなぬ嶺とて明ぬよそうハ
十九日細川兵部大輔新人家にて影を探く
新　樹　座をて茂まつ（くさ一本）きて深も遠ゝ都もしにしまつ精に

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

顕　恋　まやのあまりにつらしものまゝ孔心の奥もかくまきこゝハ

島　鶴　ゆゑなくてゆゑなきをぬふる雨の時ぬたゝの島よゐる鶴

廿日草庵月次に

採早苗　まゝ苗ゝる路のゝ田の水もゝめハ日の緑とゝ稼の松ゝえ

逢増恋　松とかゝ稼いとゝ歌をそへそおくをまさりを浦の塩ゝ

遠村鶏　里あまやゆふつゝ鶏の坂こえくゝ鶏ゆゑまゝのゝ世

郭公頻（當坐）　郭ゝ田中の杜（松一本）にをちかつゝはまる早苗の稼をおくゝ

時ゝ驚恋　いつさて（き一本）やま田のゝさのひさすらに鳴ぬもつゝ秋の音信

路　芝　学ひこんやまとゝのゝ我とひて（志り一本类）問ゝきにおくぬ花の芝ゝ子

廿六日ある人の一座奥（浩一本）りをしに

松影浮水　座の西にせき入くみよ松のもの蔵うをぬ新ゝ水のうゝ

夏草深　夏草のみとゝの洞のゝをつゝしたてる野中の松の一本

氷室風　氷室ゝ出ゝ氷の雲ゝも雲ゝ野ゝへの風ゝすゝしき

故郷恋　人ゝ心ゝちゝえにかつゝえく契ゝ見りふるさゝの雲

海路雲　船おほくなゝる沖の帆柱に橋やかゝく風ゝおひくる

六月朔日三井寺へまゝりまく佛地院僧都長算

坊の月次に

名所氷室　社ぬらしもる身やこの氷室川ゝん世涼き淑をも忘まく

晩夏涼風　六月の照日もしらぬたゝ山ゝせたきのゝ心やに秋やこも見る

悔前世恋　我世ゝ（うき一本类）ゝ心ゝ此身にやまゝ川のくいてもあまる水のしらゝ

當坐
夏塵　道のへに葦ことあらしまとふ風妹せある宿の床夏のむ

夏杜　もらなくそ水（も一本）のあらはにせ蝉のかくのことまる杜の木陰

夏筵　やまくぬるよもふなのへそ一夏もとくへき法の筵なるらん（ね类）

夏夢　時のまにあくるハ五月さまくにみえて結ぬ夏ハ秋の和

二日勝学坊と云所にて題をさくりて

早夏水　松ゝせのそもかきまてふ重にふるまつるの陰に夏やこ位

顕涙恋　思川あさにてもし流しくもうき名をまけ神の上陰

湖邊鶴　鳩の海の濱松ゝけ（え一本）を秋こそやなひくいなものこの鶴

四日右京大夫の家の月次に

郭公　ほとゝきはまとなるあなを恨てやタのこもこもかつるらむ

子松

五月雨　さくこ丸ハ夏の体屋にかふまゆをしよりもきき新の糸あ

別恋　志ゝそ丸ぬ人にかたりて衣のもはゝむかふる花のさゝ糸

懐旧多　清にまむりまに詠しのふしの数さへ法りるとし哉

追加
忘恋　ちとのもも忘なとおひかたる弁はちう人の庵（庵一本）とて

八日修理大夫の家の内に月次（ありしに一本）

夕立雲　夕立ハあらく（にあらし类）落来てむ来雲なるさまくまとの山かと

水風涼　山松のしつえうにしらつ風にさはらはる池の涼しさ

暗天鶴　久しくの天つゝふ日にも孫もしらつ鳴のかるさしてもるさ

當坐
郭公稀　花なくて落る梅の陰にさへ遠にまれなる山ほとゝきは

名所氷室　志まつるゝ山のまむ丸そゝゐる氷室涼しき杜（まさき一本）の上陰

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

寄風祈恋　恋をしとするにはあらぬ神風にあらぬ[illegible]のせてのゝ

古寺晩灯（夜歩一本）　我のミう聖のみてのとりおく雅彼のちに消ぬ火のかけ

同日藤原利永[illegible]法南宮法樂とて百首歌

をたむけしとき中に

早春　神のまゝ[illegible]の[illegible]春立めくり[illegible]

閨扇風　かへにする[illegible]ハ閨の内の扇に風の[illegible]（の一本）（桂ハ歩）

山月明　[illegible]

待恋　[illegible]

旅行　[illegible]

十一日大光[illegible]

氷室　氷室[illegible]

夏草深　[illegible]（と一本）

適逢恋　[illegible]

田村竹　[illegible]（と一本）

十三日ある所にて讀[illegible]

早夏　[illegible]

蛍火秋近　[illegible]

寄月尋恋　[illegible]

旅舘嵐　[illegible]（に一本歩）

神社榊　[illegible]

十五日金沙とゝ云ものまち日法樂とて一百ゝをすゝめ
しゆゑ
若菜　埋めともおゝふる沼をさはらしる雪をやゝの（小楽）みな摘らん
落花　かゝの世の立をもとゝなるゝ夜むにまゝる小蝶も夢とゝよとや
更衣　立ぬるゝ山の雲も只ゝもとへ右のへまるゝ日まあひぬる
山月　木ゝるよりもむしふ生弱のやゝに新さひやゝ三ゝの山のもの月
忍逢恋　人をよかさぬる夜のおとなひハやもしかなるもしるゝ夜へ
述懐　まゝる山おとろゝ下の立のまゝも雲の葉をむすふまゝりて
十二ゝる兵部が浦夜之光樂ゝとゝ寺まゝく月なゝ
沙法あるしに

旅夕立　坂下る木ゝるのあさ夜ゝをうてハいさむ斗にあらしゝ立
沙月涼　おくまゝる洲の志ゝ涼くやみかくいさこの山のもの月
増恨恋　ゆきこゝの秋ゝまゝりせへより濡ゝる汐そゝしを深むる
早（當坐）夏　夜衣のふるともなく立ゝのむのかゝりのうゝ風そふく
樗　ひきてゝも一ゝ樗此ゝのさゝ時の雲なるそ木ゝ
寄山恋　分入し道もけもしさゝ夏のすけなや人のゝのゝのもの
釈教　彼岸ゝらかゝる月の（も一本）みよせよ出てハ雨にゆゝぬよもなし
十七日上総分家の月次に
夕　旦　いつまゝとゝのゝそ山秋の白露ハ扇におきつゝ夕のゝのむ
納涼　秋もこゝ夜ともいくいま稀松苔も緑のあらしふくのを

野水　とやこのる楢の宿乃就もこれ聖雪の遺庭ハ其めとも

郭公遍（當坐）　友をとる世よおしまへて新名あらをふらをる夕雪のる

宮鐘恋　中陸のこゑにかなしたのこゑに（ちきり奕）又つき出てゝ（そて一本）又るよのさい

江雨鷺飛　河そひの流に（江奕）まさくれ鷺のむら雨志のくまのむら立

廿日草庵月次りし

河螢　皇河衣のせゝつゝめとも袖にあまるや蛍とふらむ

晩夏涼　岩ゝ孫の水も友なし杜の風かゝ生く宿る谷の松のけ

遠恋　思ひ孫の夏詠をまとゝさめゆゑハ分に也花にさまく篠原

春曙雲（當坐）　夜よりもまつそあらなるかつ消くむよなるて嶺のよこ雲

沙月涼　照日新むるハまさこをむし明の月に雲おくせとの演風

秋田　あまふ舟おし孫のほなこ打出ぬ姿をまを浸る杜のうら風

澤氷　月そすむ明年の沢の志あよりれし鴨の床の氷りし

旅宿聞鐘　松のもの月やをしまにて志ひ之後の旅孫の鳴（明くこ一本奕）の孫

廿三日左京大夫の家の月次に

遠夕立　旅人の袖志ほまくや八百日行演詠宿なき末の夕立

樹陰逐涼　友なくそ世を旅人もあひ河末の木石の上の住ひハ

杣川筏　みさまひ丸木のもしら杣川になしそへてや筏さすらん

竹亭夏来（當坐）　宿の夜友よりるも紫の竹のよのまはさしもかそらひ

閨中扇　手ふなくしひ里の扇に結ぶ末のむすぶぬ杜の風ぬ見ゝ（多一本奕）

恨身恋　忘るゝ身をとし爲によるの流のかへすそて消し詠の心沫

山家苔　山さとの庭とてはなるなりしかなくむせる苔厚く

七月朔日南禅寺東禅院景南和尚の勧を示

く八景詩句の色紙を始めたりし自分の（の加之一本）人数

哥方飛鳥井中納言入道祐雅息中納言雅親冷

泉中納言持為畠山修理大夫入道賢良細川

右馬頭入道賢竟孝法印愚弟正廣

遠浦帰帆　沖つせ立夕陰にあるのかへるをとまて舟の（小类）いさり火

五日備前入道浄元家にて影をさらくく

稲妻　たへハんにちのしいなつまの光のまゝにも光世へぬらん

虫　山深ミおこたりに鈴と吹なせハ擦かなにしたりくなる

子枯

鶴　みさこゐるあら磯浪にふれ松の同しきふる鶴の徒こゑ

六日刑部大輔家の各月の会に

初秋見月　見ゆうかひてさる月の毎あはてるへき衛やなくらん

霧中草花　色さへの秋のむかしをむらさにしあらはるる霧の秋風

浪洗岩苔　岩ほにも誰かさ稀んあら緑の浪の手ほく苔のさ衣（逆一本类）

野徑夕鶉（當坐）　深草やまちしきも（む一本类）星ちほの夕の明へにうつらなくこ

宮の裳恋　かくれくも神やハぬ山んたをやめの上裳の浪にんかくしハ（ク一本类）

旅宿夢覚　まてくらぬ夏の末の空の笠ほく枕のそのに月を落くる

七日朝（ナシ一本）　たゝ京なまへの家にて読ふ七十ヶ時中に

七夕雲　くるゝよの毎まちかほて柳様の雲の紀れなる天の川岸

関　霧　明るゝる霧は埋こゝ関もなしてゆるやいつこをまの浦法

偽契恋　さまくに頼めおきてしむとこそもあはぬんのうしそまさき

山家水（ナシ本）　苦つるふ雲をとうくるものみれんをそさもたへぬらさと

同織女夕修理大夫の家にて七十年讀家の中に

七夕雨　玉川えやはまさらんなみまさの契ゆき雨こきたとも

舩中翫月　いつるまもさけさまとやほの上の月に帆おろ浦沖つ舟人

搗衣至暁　くはしておもなきも明るよの袖の別の衣なるら無

懇切恋　霧消ぬ契ばちは何かせん命かなてしなくも乃やと

寄水釈教　おのつゝあつる時にやとれは水も思ひ月も尋ひ

十日殿下一條殿よりて法樂とて題をなはしに

蟬　うつまくる梢のるゝにおとろさて杜（松一本类）のかくとふ蟬の一こゑ

椎　柴　山風の柴ゆへて日新にも桂のうしもの消ぬ雲のなし

契　恋　たのめおけそ此も契のみなしにふるへきおふの浦法

恨　恋　葛なるぬ何のそ木の風ふてたうしみぬそ此やんなるらん

澗底古松（ナシ类）　松ちき（ふか一本）孫くしやのるゝも出ひ雲志く谷の底の一こゑ

十二日ある所にて讀家あつまりしに

新秋露　秋にてたうつまくる新年あらふ霧のぬきはの秋の地風

秋旧恋　床のなかふるき浦にみるゝ我侍もみそぬ秋のなし

秋夕（类ナシ）橋　みをしらし此世の夕のつゝりのそのうき橋の秋の夕雪

十六日右京大夫の家の月次にて

初秋露　秋きてのあるとやみえん老ぬれハ時そともなき袖の時雨と
瀧邊月　石走る流の花枝をとらはしも瀧なる玉とハ月に思ひたし
窓笛恋　笛の名の十里ゆおろしまてふて思ふ故にまるとつゝふを
窓箭恋　あふさえ天のもと矢をとらしても恋に命を極めましかハ
河　秋の夜も（和歌）落鮎つきて西川や石に卧る魚を拾ひ
社頭　岸をくゝ住よしの宮はたり濱に数そふ人の家々

十七日上総分の家のこゝろに

外山夕鹿　鳴鹿の思ひのをやまさはもふかしのくれの松の下柴
秋尋恋　りたも思ふあらりにまたなるに秋の日新そんこしかさ
秋夕浦　おきつ風あらはれたへてつる金勢新む浦の苔屋を

十九日大光明るまく読おあらしふ

初秋荻　秋のあるを出さく人の為にてそやてもうけ玉荻の初風（上一本）
池邊薄滋　初尾を袖につみも埋まく落るにをいき原の池の
岸頭待舟　さしむひ舟る程の川岸にむまさつ人のおなしんよ

廿日草庵月次に

稲妻　秋の田を深のめしつるよりい稲の妻ある雲のかなひち
虫怨　蜂浮き虫のうらみまゝ葛ものんあはをてのつる明へ
悔恋　さても相契ふつむ中そともあらていかんこえまし（ま一本歌）
深夜月（當坐）　更まりいつての夢の枕をうせしき（く一本歌）相里の月ひてるらん
暮山鹿　かしなるまさ鹿のつなのくるまハ秋ふへきや鹿の鳴らん

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

宮秋原恋（ナシ一本类）　やさのやぢとこ稀の神やさに稀に秋の原乃は茅生

秋江葦　鞆波江の秋のほなこにへてきぬ芦ひ有しかのよの春

廿一日常樂寺の月次に

草　花　秋嵐明人の稀とあらふ花のよくさの露のしら浪

尋虫声　宮かくそ草の原をやとふらせんやて消りきのあらむ

樵　夫　もちなりしきりかる世の苦さをしてやさしく四方の心人

夜聞荻声（當坐）　荻原や嵐たるしこれ秋の立来るおもしよるそ勇まむ

宮の鏡恋　くれもこつた和にもあらぬ庵読りしこ人の新に恋（こえ类）稀と

行路市　道のへやゝの風のこ（も一本）忘れ市に人なき葦ハつりりく（く一本类）

廿二日（三一本）修理大夫の家にて読ふのあるしに

秋　夕　ちとまつものなきハいのなる思ひ共秋にしらぬ秋の夕雪

恋　枕　深山つ桃のちまたかろうらきを誰かよ居にしらん

暁　山　ふて嵐あつきいつる星は清く晴る嶺の松のしらかと

山寺煙　寺山の茂木の枝やまぬんをのおとしてく烟ゝ浮や

廿四日三井ちにまかりたるしに（く一本）佛地院住頼長

算坊にて読ふてあるしに

秋夕情　みるまにて夕の雲のそこそ秋ふ秋の思ひの雲や浮らむ

宮秋待恋　月待し人にいふべき人もなしたのめてくる秋のよもふ

秋眺望　明ぬる末望の山の入あに霧ふきはれ蛛のしを風

廿七日同坊にて読ふてあるしに

初秋晩涼　新ふきゝ夕日かゝ見ハ心なゝぬなゝ為も涼し秋のもつ風
對月忘憂　住るこゝ世ゝるゝ秋のせめくるを拂ふかむ月の下ゝ世
待空恋　まてハうしまたしと思ふんをも言ふんと思ハ思ふ恋
市旅客　心のつも旅り人とかるの袂のかけまて一見て出る新市
廿八日五智院僧都基（甚一本）算坊まく讀ゝあるしに
草花盛　いとゝ風ふきなゝらの夕露ゝ見ゝきつゝ花のそゝ
秋忍恋　むきゝも秋やく塩の袖烟立なゝよ心やのあしのやへふき
秋暁山　松木月ゝなゝへる巖ゝり霧立秋ゝあつき乃山
廿九日茅屋にかへて侍るにある人連来んむと川に
ゝの教ゝあまくゝのしかともたゝつゝなくよむとも

なくあましをやまひきつゝまく此ひかしいのち
あらハ家よむ勇になりもやと思ひしにくハのひなし
せめくの深いなもとくかきつゝまゝ祝紙ひ
よせてのき浮くしかとも手ものなまてまみ浮け
きるまゝつゝをまつゝ侍るよしきくにあまもまゝ
し妙りる　日室上人かのこめよとも法む經一部の
をも侍しハつゝみまゝ一そかきてと侍しまゝ
法ゝし侍る
水くきにぬうかこの消ましをかき歌をる法のもの
晦日今宮にて詩をしに社勢秀雅の坊にてよみ

[illegible]

初秋風　[illegible]

家隣恋　[illegible]

山家松　[illegible]

八月四日右京大夫の家の月次に

夜　鹿　[illegible]

月前露　秋風も[illegible]

絶　恋　[illegible]

披書知昔　[illegible]

五日修理大夫の家[illegible]

子拈

雁交霧　[illegible]

暗夜稲妻（暗一本）　[illegible]

家雨恋　[illegible]

故山猿叫　[illegible]

十一日好[illegible]日宝上人の坊[illegible]

行路薄　[illegible]

月前遠望　[illegible]

恨　恋　[illegible]

水　郷　[illegible]

十四日[illegible]入道淨元[illegible]月次[illegible]

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

[illegible]

萩移水　咲かる岸の萩原のつちりくみなまえなる玉川の原

深夜閑月　おきつまり又り月に露はおちて一葉もなくぬ庭の萩もち

家鴨恋　契しもうきてなくなく鴨の足のみかく浮き江とそ恨る

古寺残灯　むさらぬ橋ちの所にの小袖のうなくて旬ともしらず

十五日大光明ちの月次よ

夕鴈（初一本）　延ちに舟雲まの浪の夕月相そ見もなのふ所る鴈の孫

閑山月　ミ山本の秋のちのみも落る葉もおとをぬ谷に又るよ秋月

秋（一本ナシ）　恋　ちきよの秋の忌ひに待恋ぬ人ともの家やとふのまちにも

初秋月（秋言志）　せつハ猶涼しく成ぬくる秋の袖風俗くみかの秋の月

（いく秋かたのうしのせうくあふきさし　星の雲ふる分ともしきしてく　一本）

契久恋　おの世もおもをくちぬあらう孫よかくてやたとも（も类に日上）身ハ成よけん

秋夕浦　いさりのうちする延ち人ハ家ハ枝も手折ぬおふのうらなし

同　秋草庵に人ハ来ちて読ぶよみし事ふ

已入月　千里まて待やいつん月入しこのあるさの秋のもち人

入後暮月　松ゑよ千年の秋を伴ひて入よし嶺の月もたてまし

家月恋　うつまり雲もうらめしく秋ともみしよの月のんかまさに

十六日光樂ちの月次よ

遠郷月　くれ淮ふしの里のあまた桃まう菜ちき露の月のけ

家の月恋　ちしさらハ雲ふ江月の都ちくせうるらん恋の袖のやつまと

月前夢　新きよきに川へをとをぬるう内にさるさへ夢のうき橋の月

當坐
不知夜月　光をも名をも明るをゆつるらし十六夜のまちまちなる望月
月前荻　荻ふくや月に天飛厂をきてく秋風寒しほの上乃雲
月前鹿　をしか入る山の月に角さゝるあらもせきほしき葉桂葉
宮の秋月忠　秋の宮の星ハ始て忠ひて月に忠ひを又そあ清むる
十いる七條の金光るまくくにあらみしに
田鳫　風をよくあらはきのふのかを回り厂の深や落穂淋らむ
秋夜長　明やらぬ秋の枕に忠ひたるやあの夜忠ひぬせきよの闇
遇不逢忠　まつりし宮ゝよりいえくあそこ山いつ逢坂の花ゝふらん
古寺鐘声　紫の雲に金のむかつをさゝ夕日といそけ入あひのさゝ忠
十九る芳野浦　忠てしき人あまかつをゝる帰ひとゝく

子祐

百そのかのふ一字の名号を一字つゝ冠におきてさく
められし中に
立春天ふ　名にしるきこたの羽衣みさえくゝふやすち日の新にあふらん
餘寒霜さ　立のつゝまちの嵐の冬の雲たかりと結にみ玉そふらむ（めけ类）
簷梅む　村鳥の羽風けちかき新床に夢ハのきたの梅ゝ玉そさる
暮春藤ふ　夜も夜にかゝるをりまちのうらむらさきのそかたるら雲（や一本类）
枕邊虫つ　月ハ人よるの星の玉消し人も枕もふるき世の秋
関残月あ　あけぬまの浦まのゝるやおとろゝ浦さの雲まるら浦の月（类ナシ）
遠紅葉ふ　ふまいてぬこ山かゝ玉の思川うきみこのあれのもみちを
暮秋雨あ　秋ハいぬ狩そのこせ雲と九星雨と時ゝしりへこふ遠し

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

廿日草庵月並に

月照獨舟　古江ある水にも月ハ並舟のたらひつ出まきみ所の新

秋日村雨　秋の日をそむ出ハうゑき村雨のそ本にかゝる山そそそふ

押涙悔恋　袂とハ悔のやちしを涙並てあくるなりとて我なる

関（當坐）　月　月のりる新いあらせ芦ふきのまゝの関屋のやへの汲風

寄風恋　別ぬ出ハ手枕うとき桔の戸のすきまの風そあのあはむ

懐　旧　抱あまたむかしをみしめよハ深うかハぬ時のまもなし

ゝ日廿日を定家ゝの正忌日まく（ゑ出ハ一本）吊ひの為にとく

彼詠ぶまゝ河けを又秋の出もるぬへしといつるぶを

一字つゝ句の上におきて秋のぶよむ屋しとてむとく

ゝまゝ秋し中に

路とふもたゝぬよの侍ハ人ふもたちそふ秋のまつかせ

廿一日（二一本）和ゝを持病ぬむつしく笑ていつゝへも出

ま九月二日修理大夫（入ゑ一本）とふらひにおもしてぬまゝら

もとく縦冊ゆ法あるしいなゝうくさ三十そうぶ（の中に一本）

あるし（ナシ一本）中に

鳫過湊　玉壺を袖の湊に浮くおきて思ひまゝる沖つ人の袖

擣衣寒　宿ゝえぬ川ゝの秋の霜のよふ浦もあやうつ石をそさく

寄衣恋　数ならぬ緑の衣和を重袖深あてなるそもの心遠

塩屋烟　延やゝ住ゝやの塩干のかゝまり蛇としもなき烟ゝちて（て类）

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

廿日草庵月次ふしなしもと人々申さましの事
いなひのこくく

田　鴫　故るまゝ稲のくてゝやまみたの田面の鴫のおとにまかせて

紅　葉　子の末持むの下むもとゝやハ志ほの品のもみちを

出　栖　淡のむ松の落ものふて宿を嵐も志ほ人も回来ハ

當坐
閨　虫　我為にまゝ知るむしや閨にきて雖なるそのふにまゝらん

寄垣恋　身ましめき行のまゝ垣ゆまきてみしの月の宮治の川かせ

杜　柏　ゐるまゝの元のしのむ柏のつおしハしまゝ乃おてかの

江　菅　延ち小舟嶋ちきめくまゝ世経の入江のまゝ愛からぬ日も遠

廿二日明栄寺のえに

秋夕傷心　いとせめて秋と夕の一ときも亡霊んと雲ハ木ゆるかる月

暁更月　終夜雲なきまゝをおくりきてんとふくれ乃月

相互忍恋　かもしきともにんハつゝ孫やかのもかのもの人めしきを

名所市　いせ人も市に坂ちえくるかきてあへの田面にさワ人の孫

廿三日右京大夫家の月次に

小鷹狩　山のまゝにむしやさきくかゝ衣をそ雲の野ゆかつんをら

烁不留　志くるもせつよりまゝの関ハなしぬまてさいらぬ秋やうん

寄鐘恋　鳥羽むのかゝも一夜の秋の寄ひとりの為に通る鐘ハ

當坐
夜　鹿　つまゝ恋のまゝのすゝの孫せ夜もふさてや庵の鳴明ハ

紅　葉　交ましくもさハ世の中の人ハもみちはるより松そよそなる

初　恋　我そゝ神まきかゝる神人の源もふゝも清みやゝまる

水　郷　稲葉のやあまきの河原ゆゑなきく雨も嵐も知らぬ里人

廿七日刊行大浦家にて

紅　葉　おもふに清の結むし人絶く岩垣もみちとゝぬ秋ゝ

暮　秋　秋そ狩りへ志るしぬ花鳥の語ハ夕乃雲ものこしを

恨　恋　ちるしこし船もまふゐるかちを絶身をうゝ風も吹ゝ出る

懐　旧　こるき世を思ひ志のへハ心よりのゐる源の又やなり出む

十月のもしめ恋ゆゑ清河ゆくしよりもかへるものゐるく

ゆゑ尾にて読ぶのあるし中に

初冬朝　ちきれる清くしの舟に口こゝもたゝへせに波の横雲

月照網代　水底のゆゑに木葉のよるみえく網代の布に氷る月新

宮風恋　此夕思ひぬるの風にしてしらるハ神やぬるしむ

山家水　谷深き巖をくくみつゝもむきに夏ゆき巖の松風

懐旧涙　まとき世に俗さしつる神代源にふるさゝ色ハこゝえぬと

十二日人にはさそはしてくまふ山の家葉をみ侍ひて

夕に建仁王寺（ナシ一本）霊雲坊（尾一本）と所にて読ぶのみしに

落　葉　おそくとくちるみちる後世にてる家葉やゝの光がらん

尋　恋　たのめしをしらぬ里人とうむ花まつらん梅と杉あらぬ門

古　寺　松さまく巖の嵐も吹ゝさて入あひの鐘をうつむ雲ゝ

十四日明栄寺の月次に

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

落葉　雲そゐるゑハ木葉のかくろへもなれ山姫や神さぶらん

千鳥　鳴千鳥妹ゐまゆゑ川風もさゆる都床にかよふ雲ゐ

初　恋　忘れしやうくく宵こそこゑもおとゝめ侍とり野桃をれ

當坐
落葉風　雲まよふ瀧と落るやゝ風に以捨らるゝ木のもなるゐ

恋　帯　月の河南の風にとく帯の一ともなる雲もうらめし

社頭榊　御戸をとく神の御宇しや神ぶきたつる榊もふ白ふん

十七日上総介の家のこゝろに

冬暁霜　宵のまゝハ忘れし座の木枯に沈くさゆる五ゐの雲

閨上霰　閨のこゝに臣枝葉ゐてむ柏うつや霰のおとも稀ゐ

宮月恋　我衣の源と月も思ひ出ハ星る恨を身にやりくさむ

江舟　船人ハ(そ一本)ふしてきみ(らう 同上)まれにまゐもかなる雲をハ恨ゐ

十いる右馬頭の家にて影をさくらさく

千鳥　諸ともに鳴や千鳥も水なるのかもの川原の雲の所ふの

宮雲恋　中ゐにうきて消ぬと身にそゐる独の雲のくるゝ秋かせ(ゐ一本 类)

古寺　言葉にてをさゝひく小和歌や入れの鐘をしく氣ゐ

廿日草庵月次に

夜時雨　閨のこゝによるの花をかへ見ゐ雲やいこえん間ゐかる月

寒草疎　ゆゑの一むすゝきまゐ稀き(こゑ一本)手にまゐ雲も氷るゐ

野亭鐘　志ゐさゐしさのうへ(ゑ一本 上类)ゐに鐘をなる里もなゐ仏なる明人の仮様を

當坐
薄氷　山河の氷のしにまゐるゐ木のまゐる日乃の今日乃さゝ波

尋網代　毎火よりてそのうるはの子の網代も男をしる人よりて
近　恋　我方の歌をさえ後にへむてこそ焼けちらの塩竈
山　寺　るの名もいさしらぬのおくの日ふりの杉の門にもえそく
廿三日　たゞ家の月次に
落葉混雨　園のこゝにおとしたる花の露のうへ木のもとのそ夜時雨なりし
寒艸帯霜　草の原枯りしもとかれしゆゑこそしらぬ孫たき世の霜
羇中憶都　津かる日をまみさしの家よかへくもまゝさそ旅るハ忘れす
當坐
初冬雲　くれハ世に時雨んとしてしらぬ立雲こそ冬の地なり
簷早梅　梅の香を末その風に伝(とう一本类)してうらみて枯しあのくすかな
難忘恋　忘れ此身のなりん時へまてハ忘れ逢ぬ事ふりとやしる

峡猿叫　猿さゝふ山まひ逢ハ雨るとく岩はよりて立雲にて拝出る
廿四日　修理大夫家の月次に
時雨過　夕日新かくしもあへ後詠もなし時雨消つる雲のむとむら
暁水鳥　いそくしやまる山ふとえて歌詠のあ所の月にしかものあり
関屋煙　関屋にハ焼火もみえぬ海口の春の烟やあさてたつらむ
當坐
松上雪　日を重孫雪も昔の友まつやふまふしまの言所の雪
埋　火　埋火に炭さしそへくしつなる園の光に明るとそまつ
窓の鶴恋　無しむてなく孫よそなる歌ハ林も重孫ぬ鶴の毛右
野　(沖鳥一本)志しら鳴る雪のむけらみもたえて雪さ小枝の雪を風
廿九日　権律師心敬　唐画の油(ナシ一本)の地(の同上)に賛をこのよかさ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

ことはりにたかひしあるへく、のこさるましけれたるを
世人の心はへのこむまし中にふ水のうへに梅を
咲かせつるをかなしむる人あり西湖梅といふ人の
侍るを

夕霧雪に包みも梅か香のにほひかよふるなさ

十一月五日浅茅生丈の家の月なみにて

石間薄氷　冬ふかき石間の水のうす氷あさきは猶ぞとくる日影の

野径深雪　埋めども深く野の道に花をあるよ跡やつもりゆくすゑの跡

寄宿木恋　いかにしてもとめて一本の宿り木に及はぬ枝よ我はぬれつ　乙異

當坐
帰鴈　春は又めくりこむあつらへ小車のとこよの花のまちの里人

初秋風　けふよりそよの風の音にけふやあまり涼しき秋のたつ風

柏霞　若葉さす葉守とふかれし柏木の露や神にぬさと手向けん

立名恋　涙するなつおもひなしなるてもえぬまさとさる浦風　○異

暁眠易覚　老ならぬ床の夢路の絶えぬらんおどろかせぬ花の枕にむせひて

六日大光明寺の月次に

寒夜月　冴ゆる霜より月のさえかへて月のかげやぬれしと　と一本異

山家雪　雪埋めまてしむもし跡もなし我住家とおもはすやはあらし　白一本異

歎身恋　我身をまけやくよりもともかくの歌の烟立まよふらん

當坐
初冬朝　冬やまつもとつる宮の小風さえさえかなりくはらし

竹間聞霰　呉竹のおほきの窓をうつくもむせる霰とかきる　ゆ異

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

恨後悔恋　身をうらのあまのこゝろめを（の一本类）殺んだにせらてかるまに乱つるに

鶴立洲　沖つ志ほ入江はなきさく夕陽もたゝぬ淋崎にこそ群ゐる

九日眼阿　こゝろもの法楽とくまゝめしに

網代辺氷　氷のこゝろ志ほ浮しのあらぬ木にむをさへよらぬやまの川浪

窓の草恋　霧ゝよ草を冬の野の契さに其待堂の下のみとつまる

行路市　月清き境ハえらり市人のおくりてつゝ宿の相立に

十日右京大夫の家の月次に

時雨　ふることを思ひ相立出にかくさえぬ時雨ふるまむ家の（のき类）月

水鳥　鴨鳥の陸に見て立水ゝきはあるもかひなき時をしまとや

恨恋　かまて猶堂の冬の野のこゝろのまに出て恨ゝぬ葛の下孫は

田家鳥　庵あまし田中の古井汲絶て残る水草に鳴るあさる

十六日光樂寺の月次に

落葉　ふゝかぬ思のこゝろを主孫てや薄の庵（庵一本）に木葉変らん

霜夜鶴　月落て来る入江のあしのまに鶴の翅もさやく（ゆる类）よのゝ霜

偽恋　うき方に思ひ志れども偽のあるのまゝさへ家にはなれる

初冬山嵐（當坐）　冬ゝ来てのこのあらしそ以ゝ来葉時雨は秋のまゝにて

冬月　ひとんこもいさ志らせの天の原ゝ来れるよりこゝろる月のけ

窓の木恋　絶ゝ手にくるもかへさぬおくふや立をくまれの碑てそうさ

旅宿聞雨　くれそうさ新たの川の岩浪にこゝろの雨を出さぬ旅孫は

十四日仁和寺藏勝庵と云所に修理大夫入道出ら

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

よし次まうてく清水にまうてしに

落葉　ちりはてゝ木の葉の衣ぬきかへは世の民におほひやはせん（く一本異）

雪　しらやまにふりもつもれる夜のまにかさなる衣きえのこる（ぬ一本異）

祈恋　まへくもいのりしかひのなきよりはいかてかやすくつれなからん

社　神まちて神やしろにみえまうしゆふまあるへくもりなくそて

廿日草庵の月次に

氷鳥多　浪さゆる月もくもらはこゝろのやとるみなそこのうき鳥

雪中行人　ゆく人のむらすゝきにもいそてかくすむるのさゆるたの人

当坐
古寺嵐　よしの山てらにかゝる橋つめに嵐ふきてともうつをりなむ（空一本）

当坐
時雨交風　ふる時雨ふきそへたつるあらしふく木枯の末（子枯）

寄舟恋　沼にゆる稲川の舟もえそ見ての行きる世くらし思ひ絶えなん

孤夢易覚　枕をもゆ独りと見しくよかくぬるゆめそうつゝと

廿四日明宗か月次に

枯野霜　野へ人はゆかつなむく朝日かけしもやきえぬくさのはも

江寒月　雲雁やせかの枯にいのる月の氷江のあまのつけ

寄衣雑　うちむれそさを夜の袖もひとまつふえのやみの夜の雨

当坐
落葉有声　梢にもかくはあらしのおとのなきをきゝしむ庭のまつか（小異）

鷹狩　鳥はかおくらさふしやまとしたのみかたきのをちこち

旅恋　うらめしく旅の人やこよひまた松かねの枕を

田家煙細　山田のかりいほのまとむくさめも絹によする錦のそこまて

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

廿七日右京大夫の家の月次に

行路深雪　駒の足とまるまで路のこゝちにも深り新そ物なくなる

宮橋忠　めくるまあへつゝきまにふくやまるのをこゝその橋もなる柱に

薄暮眺望（遠一本）（美ナシ）　夕日さし初のみなゝ雲晴て水と山とのかきりをそこゝる

古郷夢覚　月はとへみし世もなくこえぬ所詮ようこゝん古人の夢

廿八日修理大夫の家にて讀ならよみしに

水鳥　鴨鳥の初の青羽のむらゐ葉にちらる池の水の木枯

炉邊宋談　古へをとるして語まつるくらふの山の庭の行のてに

冬空忠　明なるに葉をしたし拝まてみもおなき中の山ゝ世

河筏多　末をまみ度影ようかに筏士の一もやひつて荒原山の

（子拍）

十二月四日右兵衛佐家にて讀ならみしに

寐覚時雨　あらん世のまゝてもまさに時るふまに人のうへる夢ちは

遠山初雪　くれてゝる山やほのかなゝぬ沖つ汐合ようかに深雪

絶後驚忠　うき中のをこゝその橋をふゝなりし又忠復るたそ危き

宮鏡述懐　みもあへ鏡の影をおりしたゝ家に津浦の雪を厭ひて

五日修理大夫の家の月次にて

寒松嵐　木葉をくに川にみてくまれる松の嵐そ結り出り

遠炭竈　明なる雲も横山をしやくや烟も白くたちのゝるや

山家路　山里ハ雪から猶のいとなゝもまゝ時なゝぬ冬のさむしさ

冬野露（當坐）　宿そなきに来ける露もまゝ雪の古寺の名にあふ所の村荻

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

冬恋　待人もまさきさかるしたの延の神の氷を見まして

冬床　もちをせんとまゝの床中にとまゝなるとかものあり

冬神祇　神ぞし道りふまの辻社ほとゝきの後の松のこゝろし

六日上総今家の月次にて

井氷　汲あまりて井筒にかゝし水落てつらゝ繋きみの山陰

炉火　吹たゝぬ雪さへてもちるはる大の灰立覚るまゝの下風

稀恋　たるらめやこの雪まの早の新こえんに鶯ゝ消つ

冬曙月（當坐）　冬の月光をさまる照の氷やよものたゝまさゆらむ（き一本変）

冬床巡　山莚のちるさへ新たはれ浦き深の床の氷に

冬眺望　夕日新なむ山陰にくゝりきぬ枯野の上の嶺の山人

（学校）

七日小野にて示にまくある人百ゝ人の法楽をしかに

立春　松ゝ雪の白ゆふ雪あむ神の山にまちやたつらん

栽花　誰もとへ人の思ひの種うゑしむも薄の宿のうくまと

夏夜月　短夜をいとまゝのけそ夜芳引なかゝ山にゝて月新

野萩　筑紫にも紫なるはふ野にしめの萩も秋やさきぬ

秋夕　秋ならぬ歳夕雪を集めてもうれをとくへん方やなかん

河網代　めくらさて（を一本）たてるも沸しうちつのやおろに並ふ氷の小車

寄風恋　こゝ神にやとりかはてゝるゝぬらんせつなる風も匂ひまむぬる

寄川恋　紙屋河氷のこゝに数ゝしとゝぬ契やあらはなりし

旅行　神やしん神やぬらさん海山の旅祭もたゝぬ道のうゝ風

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

述懷　この夜もいつ雲の時を学なんと夏語に告ふ風月の神

九日大光明寺の月次に

水鳥馴船　河岸に鳥ハかつまとさ河舟の水を碎くなさやけ水も

炉火似春　みしやいつんとてくる（つ一本类）埋火にまちの眠の冬のよの夏

暗後遠水　月なる山清をさ水かくもたつ（己一本）にみゆる雲の下かな勢

竹辺聞霰（當坐近一本类）　深さよの竹のもさやさ深さし窓の霧をとこふ風哉

逢後切恋　詠あるなるもつらし逢まての命の源と又やのもさん（へ一本）

江雨鷺飛　さもくもつる古江の枯葉立まてて雨のあしか濡るそあり

十一月晦日一色左京大夫教親にまうにうせられ

（ナシ一本）　夏のんもらし侍りし世仏事に経の勢こそ

子柏

うたはしみにまかきつ年しらく

友舟の入江にさきさるつの浦に浦なて老の浦を語とふ

十一日光禾寺月次に

懸樋氷　山里のかくひのまへの丸木舟たくへし水ハ氷をそ浦安

狩場雪　かりも場り袖にて暑るもしたかのとまへてちらぬ雪の一村

江上舟　塩やくやりくも小舟の綱手引入江の里のくるしにふるもそ

霜（當坐）　明ぬるか霜深さよの山のもの暑れるこに月ハのくもく

神樂　絲和をさまさなくて繰くへし絲やの小夏うたふ

別恋　雲風もおよしてとみまはりしいのんの形くゆるこの和を

旅宿　詮なくんあへてなるあひやとう雲しに似たる人のおもて（こ类）

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

十二日ある所にて読ておもしろ

冬江月　みしらぬ事をしきさいて入江の山に月そうくるゝ（ぶり楽）

冬夜衣　冬の夜そさまくもほしき山里の霧の衣おりもいさて

窓柱恋　窓してふつゝ柱にかくしやれ九重に西新そきつ

古渡舟　むく程ハあまりに波もまゝらのつゝしゝ波に舟やなかさん

十四日明栄ちよくよみおゆまし

時雨　いくしる時雨のしめの足へゆゝかしなくてのめくる里人

神楽　うたふなる（リ一本楽）紙やの小菱もてくも東のおうの渡るよの霧

尋恋　しるへしる人のかゝ又（又一本）むしきて又おしてハひやなかん

樵夫　山路にけ新しるをの夜衣おるや孫まそのむへ如説

出湯　熊野詣やきの内にもつきつる湯の飯あむ冬の山毎

十六日右京大夫の家乃月次に

冬朝　あさ川やうへとく水のしる氷屋きやきの中へゝほらむ

冬月　しらまさへ光を渡る人やなき月の影の霜乃ふるゝち

契恋　せしのけくも孫をあらふる契にも八ちのるのあや恨ん

渡舟　やゝけり舟も時のまゝ梓ひむくましほのやほ乃おひ風

廿日草庵の月次に

寒夜衾　磯枕あまのぬれ衣風さえて浦の（に一本楽）ふ屋をかくる海ゝ

年欲暮　つまなくもけ年のとくむのとく我方もちきまるをやこん（こう楽）

念願恋　いくしきぬ程にもうなや詣恋にあるせ（世一本楽）ハうこれ程なりとも

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

當坐
芦間鴛　いつの世よつゝひきなきしをしるの芦のしのひにむとり鳴おう
佛名　となへおく三世の仏のその中に我名やあらんしるへもなし
祈請恋　神ゝうき恋にしたなとの風こそも以ぬみてきハしてもなひす
古寺残月（类ナシ）　鐘の音に称るも思ふる在明の月のかさきの山のむしろ
廿六日修理大夫の家にて寄雪こいつのとしも
あるもし讀ぶ乃中に
冬夜嵐　明ぐさむ嵐にあるしみのおくふきかゝ浪のよもの白雪
都歳暮　都をもむ乳の世路とみる斗氏のゝるにくるまふ
馴恋　君ゝ手を我もとまてのいける世に深き契の新なりけそ
名所浦　住吉のうらにのてこそのものの松の林に神やすむらん

廿七日大猪大夫の家の座にかゝる歳山の松をうゑ
うゑしく住吉の社と思ひなきしへ侍るてみて当初
花鳥井中納言入道（ナシ一本）　祐雅　にぶのをかしまみしに彼詠
せられしぶ
せるゝへき神の誠（うちと一本）をうつし宿に歳世ゝ住よしの松
小みとしを予に和すへきよしまさ神しかハ出付侍るなり
二ゝに神やすらん樒稱にかものもそのきみよしの松
此松（社一本）のそもに山里をつくるたりしいてましに一よみ
みてきよしまさ出し祝に歌をさくりて
寒松風　手寒き歌の宿の松ゝえを吹ハ（け一本类）きみよしの浦の神風

117
105
2

雪　やゝやみやまをまさしく（うしき一本）ひのしき風以志つまりてくるせつぐ

待　恋　立ぬるあつき袖のたゞに光（ナシ一本类）落てる月もうらめ（の袖日上）

船　湊出の大舟おくるすし舟にも藻刈つゝかへるうら人

神　祇　神まをハ子の尾とハたゞをこれ新たゝ苣の宮柱りも

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用